

比較宗教学の視点から観るカルト宗教の人間観

川口 一彦

はじめに

カルト宗教を比較宗教学的視点から考察するようにとの課題を与えられた。かつて東海聖書神学塾の神学生と共に東京地下鉄サリン事件発生の直前にオウム真理教名古屋支部道場をリサーチした際、⁽¹⁾そこで見た光景は、出家した家族一人一人が何処に住んで修行しているのか分からないと話した女性出家者（ヘッドギアを装着した母親）の痛々しい表情や、毒ガスから逃れるための空気清浄機の轟音に私たちは危機感を覚えた。また息子を破壊的カルトから脱会させるために祈り続けるキリスト者家族の苦悩を見るとき、超能力者教祖と自認し、人から崇められる虚言性人格者的人間性を無視することは出来ない。

本誌では、与えられた課題から社会現象を背景として発生・派生、台頭するカルト宗教とその人間観を考察したい

と思つ。

一、カルト宗教の類型（穩健的カルトと破壊的カルト、カルトの概念は多様）

カルト宗教⁽²⁾は一九七〇年前後より北米やインドで顕著に展開され、特に破壊的カルト宗教と呼ばれるものは教祖神崇拜、信徒への思考の心理操作思想、教団組織至上（献身・出家）主義、武器・兵器の確保や乱用、修行に効果が上がると薦める薬物使用等が特徴で、集団自殺やサリン殺傷事件等の反社会的破壊行動によつて世界の国々に知れ渡つた。宗教学の類型としてのカルトは、チャーチやセクトとは本質的に異なり、異教をベースとした人間超越神化思想（仮想スーパー・マンの製造）で、「人類がキリストになる」と教える汎神論神祕主義神化思想である「ユーエイジ・スピリットとも共通する。

西欧宗教改革の本質が福音と異質なものを改革した「のみ」の一元論福音主義信仰「聖書のみ、キリストのみ、恵みのみ（信仰義認）、万人祭司」であるのに対し、異端分派としてのセクト（例えばエホバの証人、モルモン教）は、聖書と新啓示解釈書（特別啓示の連続を説く新啓示派）、キリストと教義・組織への絶対的服従（律法主義）、信仰と善行による救済（新パリサイ派）を説く「と」の一元論信仰で、特に後者が重視される。

それに反し、世紀末を過剰意識する破壊的カルト宗教は、①聖書や異教の諸經典の終末觀を折衷し、②教祖がキリストや仏陀以上の最終解脱者・最後の化身神として信徒に絶対帰依させ、③最終末の到来は教祖に下り、悪の体制はハルマゲドン最終戦争で滅ぼされ教祖軍の勝利に終わる。④信徒の救済は、教祖（組織）への完全な献身・出

家主義（土地や預金通帳等、全財産の布施）以外にないと説く混合多元論宗教である。このよつた教祖中心の異教をベースとしたブレンド宗教は、特に終末論を強調することから閉鎖的で攻撃・戦闘的要素を併せ持つことが特徴と言える。その彼らの末路は、国家に挑戦状を突きつけながらも救済計画が失敗に終ることを恐れた米国テキサスのブランチ・ダビディアン教団は集団焼身自殺（一九九三年三月）を遂げて内部崩壊の自滅の道を、南米の人民寺院は集団大虐殺（一九七八年十一月）を遂げた。一方で失敗が外部に漏れるのを恐れたオウム真理教教団も秘密裏に内部をボアさせ、国家に挑戦しながら自滅の道を行くしかなかつた。

破壊的カルト宗教が破壊的であると言われる共通の要素は次の点にある。①勧誘＝勧誘に際して名前を出さず、狡猾なテクニックで急接近する。②超能力＝教祖が超能力と虚言的説法で、無力な人間を神のよつたスーパーマン（仮想現実）に変格させる。③善悪二元論＝教団以外は全て悪のカルマ、外界との交渉は禁物。悪の世の体制は滅ぼす必要がある。財産は善の教団に全額布施する。父母子としての家族関係は解体されて教祖の弟子となりリーダーの監視下に置かれる。④脱会＝脱会には宗教的脅し（祟りと呪い）をかけ地獄往きとまで言つて迫害し続けるため、精神的苦悩と怯えが脱会後もつきまとひ。こひした破壊的カルト宗教集団は、特に金銭的、精神的、身体的トラブルが後を断たない。

一、世界におけるカルト宗教の社会現象

1 中国では憲法三六条に、国家は、正常な宗教活動を保護すると同時に、何人も宗教を利用して社会秩序を破壊してはならないとあり、その中国で次の事件が起きた。

一九九六年一月、安徽省の中級人民法院は、自らを神と自称し「教祖に従わなければ天罰が下る」「一千年に教義で全国を統一し、新しい神の国を打ち建てる」等と布教し、女性信徒には教祖の魂と肉体を崇拜するように性的関係を強要した被立王教団の教祖・吳楊明（五一）に対し死刑執行を行なつた。

中国では世界を震撼させた破壊的カルト宗教対策として、一九九六年六月にはオウム真理教関係書類の翻訳や販売を禁止し、禁書扱いとした。

2 フランスでは、国民下院議会において、一九九五年の暮れにスイスに本部を持つ「太陽寺院教団」の信徒十六人による集団自殺と、フランスのアルプス山中で他殺体が発見されたことを背景にカルト宗教の対策に乗り出した。同国には新興宗教が一七二団体あり、内務省の総合情報局は、太陽寺院の事件後、医療や子供の義務教育を拒否した閉鎖的で集団自殺の可能性のある数教団を名指しした秘密報告を作成した。⁽⁴⁾

3 全てが破壊的カルトではないが、混合多神教国インドのヒンドゥー教には、ヴィシュヌを最高神とするヴィシュヌ派とシヴァー神を最高神とするシヴァー派が最有力の活動を開拓し、その神話には、戦闘的な偶像神による世界の創造、維持、破壊、神である主への信愛（バクティ）が説かれ、「栄光がヴィシヌ神にあれ、万歳」等と讃美されてくる。ヒンドゥー教主要經典『バガヴァッド・ギーター』（最も秘密の教え）には、クリシュナ最高神が悪の堕落した世に化身して世を立て替えるという化身思想があり、その神への信愛により臨終においても人は神と一体化し、一度とこの世に再生せず、最高のブルシャに達すると教える知識とヨーガによる自力救済が説かれてある。⁽⁵⁾

『ギーター』の化身思想（アヴァタラ）から釈迦やイエスも、「多くの顔を持つ最高神」の化身と考えられ、ある寺院の門前聖画売り場ではイエスの絵も化身神として崇められている。従つて、現在多くの修行僧たちが經典に基づいた偶像神への知識とヨーガ修行のゆえに日本以上に新宗教が盛んである。これはインド版グノーシス宗教とも言え

よひ。

超能力者サイババ（「父である神」の意）は一九四〇年五月に自らを神として宣言し、超能力とメディヤを通して、諸宗教に共通した信愛を説き、学校や病院を經營し、貧困層の信徒を引き付けて世界に影響を与えていた。彼の書物は漸次邦訳もされている。⁽⁶⁾

自称神宣言し、瞑想や催眠法をすすめて多くの若者を集めたオシヨー（一九三一～一九九〇）の集会には、日本人やドイツ人も参加した。しかしトラブルも後を絶たない。

ラーマクリシュナ（一八三六～八五）は近代インドの最大の宗教聖者として崇められ、ヒンドゥー教を母体としてキリスト教やイスラムの多元的混合宗教を主唱し、神は唯一で、どの宗教にも顕現していると説いた。そのラーマクリシュナの繼承者で弟子のリーダーが、ラーマクリシュナミッションを設立し、欧米に影響を与えたヴィヴェーカナンダ（一八六三～一九〇二）である。彼の教えも「全ての人に神が宿る」と言う化身思想である。

ハレ・クリシュナ意識国際協会は日本にも支部があり、信徒は「ハレー、クリシュナ」と幾度もマントラを繰り返しつつ、信仰のステージを高めようと瞑想したり食事制限の禁欲的努力を伴う超越思想が特徴である。しかしその能力を催眠術や薬物使用に頼ることもあつて、問題ともなつていて。

4 最近顯著になつたチベット仏教の転生活仏崇拜の經典『チベットの死者の書』には、チベットは淨土であり、觀音の生れ変わりが説かれ、五体投地の巡礼者は活仏ラマへの信仰と呪文を激しく唱えるところに救済があると教える。人間がバルドウ（死から転生までの中有の期間）と呼ばれる死の苦しみと恐怖から逃れる道は、熱心に呪文を幾度も繰り返し唱えながら仮意識にポア（意識の転移）させる段階的修行にある。そして臨終時には妄想や幻想（光）が現れ、死に際での善行が死後の行き先を決定すると言つ救済觀は、本人の努力次第に掛かっているゆえに恐れと不安が

残る。⁽⁷⁾

この教義の一部を取り入れたオウム真理教は、幻想の光の体験者を解脱者と認定し、薬物使用や極限修行とも呼ぶべき強制的犯罪行為（ポア）を行うケースも多々生じた。

5 米国では、カルト宗教の花園と言われるほど、数千もの教団が活動している。⁽⁸⁾ 一九五〇年代には禅の大家と言われた鈴木大拙（一八七〇—一九六六）が禅文化を普及したことから瞑想思想が流行。ベトナム戦争後から自己啓発・自己開発積極思考、靈界交信チャネリングブーム、オカルト運動、そして世紀末時代を迎えて終末ハルマゲドン運動へと展開。多くの大学には禅センターが設置され、アメリカ文化に対抗する東洋の神秘主義が浸透することにより、自己を超える瞑想に魅力を求める若者が流れて行き、東洋の瞑想思想とキリスト教終末思想が衝突し、泥沼化していった。

他方で終末を強調する破壊的カルト宗教の興隆は、リヴィアイバル運動のうねりの中で発生して来たとも言える。米国リヴィアイバル運動は、眠った信徒を覚醒し創造主への悔い改めとキリストへの信仰と献身を説いたが、説教が極度の終末や再臨を強調する余り、会衆の心が贖罪愛への回心よりも裁きに対する恐怖心が大きく影響し、その反動として「地獄はなし」「キリストは一八四四年一〇月に再臨する」「キリストは米国に再臨する」等と説く分派的セクト（異端教団）を生み出した要因を見ることも出来る。⁽⁹⁾

米国のカルト宗教を分類すれば、キリスト教系カルトと、インド的瞑想や諸宗教との混合型が挙げられるが、前者は黙示文学を狡猾に利用した教祖による自称キリスト宣言とハルマゲドン終末思想を極度に強調する。後者はヨーガ瞑想による自己改造を伴つた人格変化の神化宣言が特徴で、両者に共通するのは人間超越神化思想である。

二、カルト宗教を引き起こす日本の宗教土壤

続いて、幕末維新期から発生した日本の新興宗教（伝統宗教とは異なるの意味）が、今回のオウム真理教関連の事件へと展開した背景について考えたい。

（1）入信動機（抑圧からの解放と人間進化の屈折現象）

既成の伝統宗教や社会体制に反発して発生した新興宗教の入信動機が、よく知られる「貧（財産の獲得）・病（永遠の生命）・争（人間関係）」からの解決と、国家体制によって抑圧され貰しくされた民衆の代弁者である教祖による「世直し論」の社会批判も大きく影響し、新興宗教は民衆宗教へと発展する。やがて三大動機に「生き甲斐論」が加わり、主婦や若年層に浸透し、その解決として呪術性⁽¹⁰⁾を強調する教祖達が出現した。

多くの教祖達が神宣言して病氣治癒・家内安全・商売繁盛の現世利益の提供と、それまでの伝統宗教とは異なる「新種の神名による新啓示や自動書記現象」が生じた第一次宗教ブームが去り、国民の生活が豊かになり経済発展を成し遂げた戦後社会にも第二次・第三次新宗教（時代の変化に現れた宗教の意味）ブームも起きたが、今世紀末は経済効果を上げるための管理社会化、家族拡散のビッグバン化、競争社会の中で忘れ去られた精神面の感覚を埋めるための「超能力や超常現象論」「前世や来世の精神世界」「富士山大爆発予言や映画・日本沈没の終末論」「靈感商法」「自己啓発と積極思考」「あなたも神になれる　瞑想による人間神化」、時空を超える「戦闘と殺戮のアニメ現象」等が新鮮な感覚表現で登場した。これらが信徒を獲得する宗教教団の宣伝材料となり、若者たちも現実感覚を超えた「仮想現実の世界観」をメディア等を通して受け止めやすい環境に置かれた。

一九九六年のNHKオウム脱会者調査によれば、その入信動機第一順位から「理想の希求、人生の価値、自己改革、

潜在能力」が挙げられ、オウム側が信者意識アンケートとして調査した結果とほぼ等しいと言つ。⁽¹¹⁾ しかしこれらは人間が原罪者アダム以来、等しく追求し、自己の生きる価値・目的・意味つけを求めて来た共通のテーマでもある。

(2) 教祖の宗教的人間性（虚言性と呪術性）

古くは、『日本書紀』の皇極天皇紀七月の条文に、大化の改新前の混乱した社会状況や度重なる天変地異の中で、新宗教的な社会を惑わす「常世の神」の呪術教団を紹介している。虚言者大生部多が、常世の神を祭れば「貧しい人は富を得、老人は若返る」と巫女たちを従えて神のお告げと惑わす。大勢が財宝を投げ出し、酒や野菜や家畜を路ばたに並べ、「新しい富が入ってきたぞ」と連呼させた。しかし益なく、搾ばかりが極めて多く、秦造河勝は、民の惑わされるのを憎み、大生部多を打ちこらした。その結果、巫女らも恐れて、祭りを勧めることを止めた。虚言的教祖が、金銭と名声の欲望にかられて人心を惑わす呪術を行った結果は失敗で、一般民衆の怒りを買つ不祥事となつた。⁽¹²⁾ 歴史は下つて、真言密教を創建し、現在も生き仏として一般民衆から崇められている弘法大師・空海（七七四～八三五）が、朝廷から小僧都の位階に認証されたのも祈雨呪術（八一四年）の成功にあつた。⁽¹³⁾ この空海の密教からは多くの教団が派生した。また新約聖書「山上の説教」の部分を換骨奪胎して自らの教団の經典⁽¹⁴⁾ 作成の資料とし、教団形成にたずさわり幾度も国家警察から弾圧を受けた初期新興宗教の大本教聖師出口王仁三郎（一八七一～一九四八）もその特徴を持った一人であつた。その大本教の影響を受けて興した新宗教の璽宇教教祖⁽¹⁵⁾、長岡良子（一九〇三～八四）も第二次大戦敗戦前後の動乱期に神示により天変地異を説き、自称璽皇尊と言つ天皇と同格かそれ以上の権威を主張して民衆を惑わした結果、GHOや国家警察によつて逮捕された（後に釈放）。長岡の異常性を精神鑑定した秋元医師は、彼女を「誇大妄想症」と診断する。⁽¹⁶⁾

前オウム真理教代表の麻原彰晃（本名・松本智津夫、一九五五）も、若者やエリートコースの者たちを虜にした

のは、マンネリ化した管理社会の若者たちが反動として求めているものが超能力による自己変格や超常現象であることを知り、呪術的要素を開拓したことについた。彼の著書には古代からの諸宗教がよく知つてゐるように説かれ、多宗教の頂点こそオウムで、諸予言的中や地震の予知と発生力の持ち主「最終解脱者、真理の御魂最聖」とまで信じ込ませた。その信者獲得の最大の武器がマインド・コントロールである。

マインド・コントロールは、教祖が自己神崇拜・利欲的目的・仮想王国のため、教祖の像を信徒の心に似せて隸属させる高慢的心理操作で、創造主との関係が失われた墮落後の人間の似像の回復を「御子の御靈の内住」によって再創造する救済の主権を汚すのがグルである。創造主は贖罪愛で和解し、グルは罪責と恐怖心で隸属させる。カルトの弟子はカルマの罪障を消すために修行に励む。それはグルに愛され誉められ、王国樹立とグルに似た完成者へと変わるためにである。やがて聖名を受けてグルの左右に座し、説法や論法も似、グルの善悪二元論思考に基づく殺人をも肯定した反社会的倫理思考に変換される。

こうしてカルトの信徒は、絶えずグルの声を脳に充満させ、ある者はグルの声で苦悩し、ある者は自分の罪責と修行不足を責める。オウム真理教名古屋支部道場で見た信徒らの表情も同様で、毒ガス等で殺されるという嘘で、極度の被害意識を植え込まれたその心には恐怖心しかなかつた。仮想王国は妄想で、殺人行為等の反社会的行動へと情報発信するグルの人格障害を精神医学者の鑑定によれば「妄想虚言症」と言つ。⁽¹⁷⁾

初期新興宗教において自動書記現象や新種の神名を説き、病氣治癒等を行つた教祖達は、政府から伝統宗教とは異なり民衆を惑わすとして「淫祠邪教」の排斥を受けた（明治十五年に施行された刑法の「違警罪」の条文に「託宣行為・占術行為」を「惑人」とある）。教祖は、幻聴や激頭痛が伴つ憑依・憑霊現象のトランス状態（人格変化）から神告知し、憑依現象が消失した平常時は普通の人となる「交代人格」現象のシャーマン性があつた。

しかし、呪術行為を通して国家への挑戦や天変地異を騒ぎ立て、前世のカルマを説いて民衆を惑わし騙すテクニツクの出来る者は、繰り返しの犯罪を罪とも思わない妄想虚言者と言える。それは過去に国家社会から傷つけられ不当な抑圧を受けた被害意識からの極度の憎しみと怨恨も原因となり、それが破滅行為へと至らせたのである。日本は幕末まで、神国日本として鎖国による宗教政策の統制下に置かれていたことから宗教選択の批判訓練が出来ず、天皇制規範が崩壊した後の規範が呪術性を伴った教祖に転換され、心理操作を受けやすい環境に置かれた若者達が悲劇を被つた。こうした現象の真の原因は、人がキリストを知らないこと、神的倫理的規準を持たないことにあらう。

四、聖書に見るサマリヤ混合（呪術）宗教と日本の混合宗教の比較

すでに見たようにカルト宗教が生まれやすい背景は、呪術を伴った混合宗教が無批判なく受け入れられる点や、偽予言者・教祖に惑わされる点にある。そこで聖書が教える異教化したサマリヤの町の宗教的事件を学び、私たちへの教訓としてい。

ソロモン王とその後の北王国の律法への反逆によって試みの中に置かれたサマリヤの町は、周辺諸外国の異教神の移入によって多神教化した。II列王記一七章一四節以降には、民が主を礼拝しながら、移入してきた偶像神をも崇拜するという混合宗教の墮落を伝えているが、この神々の中にはインドや日本の多神教世界と共に通しているとも思えるバビロンの戦争必勝の神や多産豊穣神等も崇拜され、ここから悲劇と救済が起きていくのである。

ヨハネ福音書四章には、主イエスのサマリヤ宣教が紹介される。主イエスは混合宗教の中で育つた一女性に、「

の水を飲む者はだれでも、また渴きます。」(一二三節)と、その私生活の曝露と真実を説かれ、真の礼拝と倫理の宗教改革へと導く。約束されたメシヤである神の御子キリストに直接出会った女性は、喜び勇んで救いの福音を町にもたらし、多くの人々自身もイエスをキリストと信じ、礼拝の民が起された。

しかし使徒八章九節以降では、民衆を惑わす魔術師シモンも登場する。民衆からは「大能と呼ばれる神の力」とまで崇められ、騙し続けるシモンは、魔術を利用して富と名声と権威をさらに得ようと策略する。そこに現れたのがシモンの魔術以上に優れたキリストの権威であった。民衆もシモン自身も驚いたが、シモンはキリストの力に服従したのでなく使徒の力に欲望が目覚め、その威力を金で買おうとする聖職売買シモニーの罪を犯す。

多くの民衆が、彼が悪霊に支配され操られていることに気が付かなかつた理由は、混合宗教に慣らされていたからである。つまり眞偽の違いが分からず呪術に晦まして、目が眩まっていたからで、真に判断できたのが使徒のみであつたことは皮肉と言える。

日本の混合宗教を興した先駆的人物は聖徳太子である。彼は平和な国家を築くために憲法を制定したが、その思想の人間形成は儒教、祖先崇拜は神道、病気平癒・國家安泰は仏教という混合宗教化であった。やがて平安時代には、神仏混交の本地垂迹思想が現れ、世相の不安の中で、崇る神、苦惱する神、宥める仏の混合化がさらに深められた。明治元年に神仏分離令が発令されても、血肉となつた混合宗教の習慣化は民衆からは消えなかつた。

サマリヤ宗教は日本の混合宗教やカルト宗教と似ており、習慣化された混合宗教の土壤からは、虚言的呪術で惑わして騙す、教祖神崇拜のカルト宗教が発生する社会の危険性を示唆しており、こうした状況から「礼拝と倫理の宗教改革」が求められると考える。

五、カルト宗教の世界観（精神的苦惱と悲劇）

混合宗教化した国民意識こそ、地を歩き回り獲物を奪い取るサタンの策略に好都合な温床と言える。続いて、カルト宗教の世界観はどうして作られるのかを考えたい。

(1) 歪められた神的人間観（神になる人間、人を教祖の欲望に隸属させるサタンの策略）

創世記三章の記事で、サタンがアダム夫妻を狡猾な話術で誘惑したのも、「わたしの声に聞くなら、あなたは神のようになれる」との嘘の交換条件で、結果的に人は神のようにはなれず、恥と罪責感と死の裁きの悲劇を被ることになった。一人の高慢意識が全体を悲劇に追い込んでいったのである。その高慢とは「自称神・キリスト宣言」である。教祖が神・キリストと宣言し、マインド・コントロールする目的は、教祖の欲望のマインドの像を信徒に注ぎ込み、信徒の似姿から従属神崇拜を享樂するだけでなく、過去に何度も抑圧された怨恨の蓄積を国家と社会に報いる殺害計画の実行にあると述べた。

麻原自身が『キリスト宣言』⁽¹⁸⁾の冒頭（表紙絵の十字架は麻原自身）で、一九九一年十月に「わたしがキリストである」と宣言し、福音書や默示録の主や人の子をシヴァア神と置換したり自身とした。彼は自分がキリストとなつた以上、一一使徒たちを従えた主イエスのよつに振舞い、麻原王国の省庁制を創作展開する。何事もキリストの名を利用しては超能力的呪術で信徒を従属させ、社会を攢乱し、国家や他宗教に挑戦した。

彼は、自分が天界から地上界に落とされたのは人一倍傲慢な性格ゆえであると発言し、都合が悪くなると嘘の発言や不都合な者たちを簡単に殺害したほどの西口中心の幼稚性を發揮した。しかもそれを正当化し、妄想的権威と被害者意識で装い続けた。⁽¹⁹⁾

カルト宗教の勧誘は「教祖に帰依すれば、あなたも神のよつになれる」といつ嘘の共通した勧誘であるが、実際に「主なる全能の神」になるのではなく、「神のよつになれば何でも出来、自分の思いのままになる」という若者の欲望を教祖は引き出したのである。

オウム真理教発行の「世紀末コース」第19号の特集は「人間進化」、その見出しが「スーパー・マンへと進化せよー」で、内容は短期修行で学業成績がトップになつた、仕事の収益が一・五倍に増加した、思いどおりに現象が動く等々の若者体験が満載してある。そして「あなたを超人に変身させる方法」を紹介し、「超人」の二文字が矢鱈と曰ひつく。この超人の修行の世界に引き込まれると、最初期は冒険意識もあるが、人間が有限である以上、肉体や精神に限界を感じた時は逆戻り出来ない奴隸状態になり、ますます自分の修行の足りなさを責められ、精神障害を被る方や殺害される方も起きたのである。

元統一協会メンバーの脱会者は、神になつた体験を次のように語る。統一協会の神観である「悲しみの神を受け入れてくると、……恐ろしい事態が始まる。」「自分が神になつてしまい、とてもなく傲慢になつてしまつ。親を親とも思わず、見下げた態度をとるようになる。……」「人格が変わつてしまつのである。」⁽²⁰⁾ こゝにした傲慢の思考は、偽キリストの文鮮明の虚言性から発しており、⁽²¹⁾ 私が経験した元統一協会の方は、自称キリスト宣言し、教会員に自身を強要崇拜させるという事態が起つた。

デビッド・コレショ（一九五九・九三）は、少年期から再臨日時を説く教会に属し、十七才でメシヤ宣言。サインは「ヤハウェ・コレショ」。聖書研究はダニエル書や默示録で、戦争の力所に特別な興味を示す。やがて自分が「七つの封印を解く神の子羊」と宣稱し、その思い込みから事件が起きた（リベテロ二章一節以降）。麻原自身も同様に默示録の七つの教会を七チャクラ修行と置換曲解した結果、欲望実現の事件へと至らせた。⁽²²⁾

教祖が「自分は神ではなく罪人」と人間宣言し、謝罪と教団解散に至らせるのは至難だが、この破滅的カルトの人間超越主義が「神の前に正しくない悪事」であり、それは教祖一人の問題ではなく、確かに社会全体も病んでいるのを私たちは知るのである。

私が奉仕する県立精神病院の分裂症人格障害者は、前世の声に憑かれ、極度の抑圧と積年の怨恨から国家や加害者に対し、女王となつて報復する、と妄想発言を何度も繰り返す。怨恨による殺害意識は根深く、薬物療法を含めた心の抑圧からの全人的癒しを祈らされる。

(2) 修行義認と信仰義認による救済観の相違

仏教は輪廻転生や前世のカルマによる因果説から、修行による解脱を説く人間覚智主義である。釈迦最後の説法も「怠りなく修行を続けよ」⁽²³⁾と教える修行義認が特徴で、そこには自己以外のものが入る余地もない。自分が修行によって何にも執着しない空の境地に成らなければ、カルマの法則により何度も子宮に再生して苦しむ。阿弥陀が悪人にに向する因果も宝蔵菩薩の本願修行にあり、教祖が信徒にイニシエーションを授け、自己変格（成仏）させるのも教祖の修行と同様な極限的修行義認によるのである。

しかし聖書は、旧新約共にキリストにおける罪の赦しによる神の義を啓示する。イエスは旧約が預言・予型する通り、来臨目的が罪の贖いであると語り（マルコ一〇章四五節）、罪を告白する者や赦しを求めて来た者の罪を赦された（ルカ五章二四節、一八章九節）一四節）。それは罪人が超能力（者）や奇跡によつては義とされず、御子の赦しの宣言と代償的贖罪を信じる者が義とされ、義とされた信仰者は聖霊の交わりにより御子の栄光のかたちに似せられていく（リコント三章一八節）。信仰者こそ神の子である。

「ハルマゲドンが来る」と終末危機意識を煽り、個別訪問に多忙なエホバの証人に、どこで義が得られるかと質問

して返つてくる回答は、「伝道の中でと答える。イエスの贖罪を全的に受け入れず、修行や善行による義を追求するしかな」ところに彼らの悲劇もある。

(3) 恐怖心を煽る終末論的救済觀

人間は「終りが近い、時は近づいた」と真剣に叫ばれると心が動搖し恐怖心が起きる。カルト宗教発生の背景には、社会が混乱し精神的に圧迫を受けたり、新宗教と超常現象ブームに便乗競合し、終末思想で人心を脅し恐怖心から信徒を獲得していく事例がある。

終末思想を説く新宗教の系統に、日蓮主義系が多いのは、日蓮著『立正安國論』の亡國思想（災難・他国侵略難を説く「薬師経・大集経・金光明経」）の影響が大きい。⁽²⁴⁾

聖書を嗜つた者や、教祖の予言的中とか終末意識に怯える者や自己改造を願う者は、それを真に受けて人生を掛け、あるいは財産をも放棄して偽教祖に従う。しかしこれが落とし穴である。聖書を歴史的、贖罪的に読み、イエスへの信仰において義とされた神の民は偽予言者には決して従わない。「時は近づいた」と言う人々のあとについて行ってはなりません」（ルカ二二章八節）との警告を無視する者はイエスを知らない者で、神は、再臨年月や場所等を不要として啓示せず、むしろ偽予言に警戒することを教える。

オウム真理教団が富士山の裾野に大規模な土地を確保したのも、最終戦争に備えて生き延びる場所が、マタイ一四章二六節の「山に逃げなさい」や仏典の同じ用語に教祖が閃いたことに由来すると一信徒は語った。こうした閃きに振り回されて人心は惑わされていくのである。

(4) 極度の善悪・二元論から来る対決型倫理觀

カルト宗教の倫理觀は善悪・二元論である。善悪・二元論は悪を極度に嫌い、善を極度に受け入れる。善とはカルト教

団側で、その他は全て悪の世界・滅ぼされていく世界と教えられる結果、善のために献身させる。それは悪のこの世の体制や宗教や邪魔もの全てを滅ぼすと言つ田的達成にあり、それがサリン事件や靈感商法や折伏行動に発展していった。

悪の体制を滅ぼして勝つためには、国家警察以上の人材と多量の武器と土地を確保する必要がある。そのために財産が必要で、財産の財源と確保は信徒の布施しかない。そこで救いの条件が提示される。カルト宗教の救済は無条件の恩寵ではなく、「出家（献身）と布施（献金）＝救済」という交換条件とするゆえに、教団は多額の布施で満たされる。しかしその出先が発覚することによって社会問題、布施返還等の裁判問題が生じた。

倫理観が二元論であることは、禁欲主義となる。外からの情報を遮断させ、学校教育は悪ゆえに教団の教育を教える。信徒にはセックスや遊興を禁止させ、食事の制限を押しつけ、教祖は複数の妻とセックスを楽しみ、豪華な食事をし、それを正当化する。⁽²⁵⁾

またカルト宗教の食事メニューは修行を目的とした制限付で、結果的にビタミン不足と栄養失調から虚弱体となり、低血糖症や糖尿病、ホルモン不全等の障害が見られたりし、睡眠不足の不調から精神的不安定を引き起こして犯罪にもつながる。オウム真理教では、信徒に粗末な食事と栄養素の低いラーメンが提供されていたと報道されていた。創造論と贖罪論に基づく聖書の倫理観は、善悪二元論を否定する。キリスト者は、神に愛された者として愛をもつて地の塩・世の光として生きること、また万物は神の創造の賜物ゆえに祈りと感謝で食事を頂くようにと勧める（一テモテ四章三節～五節）。

生まれながらの人、異教の世は神的倫理的規準がないゆえに、人間や解釈書を権威付け、教義や組織を優先し、欲望達成のためにキリストの名を利用して、怨恨の報復奴隸ともなっている。しかし神は世を愛された。神は、混乱し曲

がつた世が救われるために、主イエスの贖罪愛に立ち返るよへ、今もこの世に悔い改めを命じておられる。

六、脱会とカルト宗教へのキリスト者の対応、対策

混合宗教の社会で人心が動搖するのは、超常現象や偽物ばかりの狡猾な情報が行き交っていることでもある（ダイヤの真偽の見分け方は、本物しか見せない点にある）。

(1) 脱会

カルト宗教からの脱会方法には様々あるが、最悪なのは強制脱会のケースである。「これは脱会させる側が「カルトは恐いから」という「感情論」や、「親戚近所に迷惑を掛けたくない」という「世間体」を理由にして、その人自身を愛さないで無理やりの強制脱会を行ってしまうなら、事態を悪化させ、ますます脱会させる側を逆に悪魔呼ばわりさせてフランクシユバッグを起させる。自分の思考で判断できないようにしているのがカルト宗教であることから、この逆を用いて自分で判断できるような環境作り（家族）が求められる。

脱会した方々のケースのほとんどが、自分自身で「宗教とは、神とは、救いとは？」等と自問自答判断をし、主体的にその違いに気づいて脱会を決意する最良のケースがある。

オウム真理教のナンバー2の地位にあつた元「大蔵省大臣」の石井久子（三六）の第一六回公判で、教団を離れた現在の心境を「弁護人の法的アドバイスを受けながら、自分の考えで考えていくようになった」と語った。石井は逮捕されてから、多くの宗教書を読む度にオウムの教義の違ひに気づき、その誤りを認め、「今まで信じ込まれてきた教祖の教えを捨てることが恐ろしく、動搖する自分を発見した」と語る。⁽²⁶⁾ 時間をかけて自分を見つめていくこ

とや、信徒を包み込んでいた大きな呪術性（恐怖心と祟り）を少しづつ取り除いていく作業も破壊され歪められた心の回復として大切である。

約束のメシヤを求めていたサマリヤの民衆は、自分自身でイエスに直接に会い、自分自身で聞いて信じた。「もう私たちは、あなたが話したことによって信じているのではありません。自分で聞いて、この方がほんとうに世の救い主だと知っているのです」（ヨハネ四章四二節）と救われた心境を告白した。

元エホバの証人や元統一協会（名称を「世界平和統一家庭連合」と一九九七年五月十九日に改称）の脱会事例では、組織・教義・伝道や指導者の対応等に疑問を持ち始めて違いが分かり、脱会するケースがある。しかしその過程には多様な苦悩があることも事実である。⁽²⁷⁾

（2）恐怖心からの解放（奇跡や超能力よりもキリストにある罪の赦しを求める）

人が奇跡や超能力を求める動機は、病や不幸に陥った心が極度の罪意識（過去に悪いことをしてきた報い・カルマとしての祟りと呪い）を感じて自分を変えたい、罪滅ぼしをしたいとの思いであり、ここから修行や靈感商法も生じた。しかし多くの財産を布施しても何の解決も得られないことを知った時点では怒りしか残らないが、マインド・コントロールされた人はカルマの法則である罪の呪縛的苦悩と恐怖の奴隸状態に追い込まれる。

人の心を罪意識の呪いから解放するのは、金銭や奇跡ではなく、罪の赦しどきよめと罪の告白である（一ヨハネ一章九節）。罪のない神の御子イエスに罪を告白してイエスを受け入れれば赦しを得、神の愛に生かされていく。奇跡は人間教祖崇拜と恐怖の中に誘い込んで奴隸状態にするが、神はご自身の愛をもって人の心の恐怖心を取り除き、平安に導く。神の愛は決して裏切らない。神の無償で無条件の愛を追い求めよう（同四章一八節）。

私自身、キリスト者になる以前は救いを求めて複数の新興宗教を遍歴し、仏僧を目指して仏教系大学の宗教学科

（仏教学専攻）で学んだ。そこで坐禅と仏典習得に埋没していたが、心の満足がなく聖書と教会に解決を求めた時から、主イエスの言葉と贖罪愛によつて回心に導かれた。それまでの混合宗教と偶像崇拜からの決別に際しては苦惱と恐怖がつきまとつたが、自分を苦しめ空しくさせている原因が、第一の戒めである創造主に背いていたことにあると気づかされた時から、自分の問題として罪を告白し、仏像や守札や仏書をも廢棄した。聖霊は、自分を縛る罪意識と呪術性（恐れと祟り）からも解放し、永遠の喜びと平安による真の神礼拝へと改革して下さった。

人がカルト宗教の誤りに気付いたならその環境から離れ、一切と関係を断つことが重大である。未練が少しでもあればその誘いに負けて連れられて行くケースが何と多いことか。私自身、仏僧で大学教授の表情が悪魔に見え、仏典の授業が恐怖で不可能な状態になつた時、御誓を求めてその環境（場、書物、偶像、人間関係等）を離れ、神の民とともに生きる道を選んでいた（モーセはエジプトを出、パウロはユダヤ律法主義と決別した）。

（3）脱会者たち自身によるネットワーク作り

この活動は脱会希望者を助け、カルト宗教への入会者を減少させ、脱会しようと迷つてゐる人たちへの最大の対応と言える。カルト宗教の内実を知らなければ対策・対応はあり得ないよう、先に救われ、その違いを知つた者たちによる相互連携の働きが求められる。現在、各地でそのような超教派としての活動が起きていることは大きな証である。

（4）教会での「比較宗教学講座」の活用

教会が啓示宗教と諸宗教（人造宗教や自然宗教等）の違いを教界内外に示し、「混合宗教の空しさと危険性」「カルト宗教・異端の発生理由」、「その教義は正統教会などいつ違つたか」「基本信条はどうして生れたのか」「なぜ人は自己変格を求めたくなるのか」等について比較して客観的に学ぶと共に、人を縛る呪術（恐れと祟り）の危険性や恐怖心の

状態からの救いの福音（十字架の無条件の愛と罪の赦し）をリアルに宣教出来る。
私達の教会では過去に、「今なぜ宗教か？」「比較宗教聖書講演」の違いシリーズの集会を持つたが、多くの知りたい、聞きたいと言つキリスト教内外の関心が高かつた。

七、おわりに

人は違ひが分かることが大切で、真偽を判断出来ないゆえに、偽った靈の惑わしの世界で苦惱している。伝統的混合宗教に慣らされて違ひを知らない者、自己変格や刺激的転換を求める者たちにとって、カルト宗教は魅力であるが、創造主との関係を断絶させ、自己を神とするゆえに危険で、それは人間崇拜 精神的苦惱 破滅なのである。

しかし本物である「キリスト・イエスとの出会い」は真偽を判断させ、「生きた神のみことは=聖書」が心のいろいろな考え方ばかり」とを判別させ、「恵みによる贖罪愛」が罪の赦しと魂の充足を与え、創造主を崇めた神の似像の眞の回復へと導く。

主がサマリヤを通られ、混合宗教の民を眞の礼拝の改革と倫理の改革へと召し出されたよつて、私達も主に倣い、現代の混乱と惑わしをもたらす宗教からの改革に励みたい。

「先生。私が渴く」ことがなく、もつゝまでもくみに来なくてよいよつて、その水を私に下さ。」「わたしが『』え
る水は、その人のうちに泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」「あなたと話してくるこのわたしがそれです。」

（ヨハネ四章一五節、一四節、一六節）

（どうか、私たちの父・子・聖靈なる唯一の主に栄光がとくしえまでも、アーメン。

注

- (1) 『クリスチヤン新聞』一三七四号、一九九五年四月三〇日発行に詳細記事が掲載。
- (2) ラテン語でカルトの意味は、崇拜・秘儀・熱狂等で、異教、偽宗教と呼ばれる。インドのヨーガ宗教や仏教や聖書の用語等との混合した教義を持つ教団を呼ぶことが多い。米国においては、天理教や創価学会や統一家庭連合（統一協会の名称を一九九七年五月に改称）、愛の家族、クリシュナ意識教団、サイエントロジー等がカルト宗教に類別される。エホバの証人教団は異端 派であり、勧誘や心理操作や教義内容から破滅的カルト宗教と呼ぶ者もある。日本では新宗教と呼ばれるものが米国ではカルト宗教に類されよう。宗教色のないヤマギシ会も勧誘から脱会に至る内容が破壊的であることからカルト教団と呼べる。現在 布施返還で裁判問題になつてゐる宗教教団の法の華三法行も破壊的と言える。
- (3) 米国のカルトに関する実際的な翻訳書は、『カルト』（飛鳥新社、一九九五年）『カルトの構図』（青土社、一九九六年）がある。『多元社会の宗教集團』アメリカの宗教・第2巻（大明堂、井門富士夫編、一九九一年）には多くのカルト小教団が紹介されてある。
- (4) 二〇一二年のチャーチとは国教会的範疇でなく、古代教会の信仰信条で形成する歴史的正統的教会を指し、セクトとは正統的教会信条を否認する異端派を指す。
- (5) ニューエイジ運動のスピリットも「人類がキリストになる」神秘主義で、諸宗教の神秘思想を統合し、自己覚醒・自己発見・人間神化、環境保護等の表現で啓発する『ニューエイジの到来』（浅野信著、たま出版、一九九〇年）。

（3） マインド・コントロールは、宗教教団がその活動理念に一致させるための手段として用いる思考の心理操作方法で、信徒の理性の判断能力を消失させ、倫理的善惡の基準の無の状態で教祖の司令通りに働くさせる思考に変えてしまう。教祖が信徒に尊崇するために教祖は神的空想虚言で超能力の全能性を示し、信徒は教祖の力と愛情に心が奪われ、教祖を神・キリストとして崇め、その声や教義のための奴隸に変えられていく。教祖は自分のイメージの像を信徒に生き写し試験を行う。しかし、教祖に従属しない信徒は呪われ、罪責感に悩まされ、精神的苦惱や死求感がつきまとつ。また洗脳は物理的手段を伴つが、マインド・コントロールは恐怖心のないままに思考を変革、教祖や組織の奴隸にさせるゆえに危険な武器洗脳とマインド・コントロールの両者を使うのを複合洗脳とも言い、オウム真理教はその一例と言える。

一九九六年一月一三日付、日本経済新聞夕刊、『現代宗教の反近代性カルトと原理主義』一三四頁、阿部美哉、玉川大学出版部、一九九六年。

『バガヴァッド・ギーター』第四章七・八節（岩波文庫、岩波書店、一九九一年）「實に、美德（正法）が衰え、不徳（非法）が栄える時、私は自身を現すのである。善人を救つため、悪人を滅ぼすため、美德を確立するために、私は世期（コガ）ごとに出現する。」五一頁。

『ギーター』によれば、クリシュナ神は世界の偉大な主と崇められ、この主から全てが創造され、この主は多様態で顯現する（「この全世界は、非顯現な形の私によって満たされている。万物は私のうちにあるが、私はそれらのうちには存立しない。（九・四）」）。信愛とヨーガで彼を知覚する者は罪悪や輪廻からも解放されクリシュナと一緒になる（「私に帰依する人は、常に一切の行為をなしつつも、私の恩寵により、永遠で不变の境地に達する。（一八・五六）」「私に意を向け、私を信愛せよ。私を供養し、私を礼拝せよ。あなたはまさに私に至るであろう。……あなたは私について愛しいから。（一八・六五）」）。

この神は多くの顔を持つことでも有名で、その姿は一章に詳細されている如く、多くの顔と口と千ほどの腕と武器を持つ。仏像の中の千手觀音像とも共通する。

またこの神は、世界を滅亡させ、敵を殺し、繁栄する王國を樹立する戦闘の神で、この思想はインド的グーネーシス宗教とも言える。

インドの化身思想を「アヴァタラ」と言い、「アヴァ」とは下に、タラは上より来るの合成語。インドの至高の神が、悪を滅ぼし、新しい世界を復元するために人間の姿となって、幾度も化身すると言う考え方。日本も輪廻転生や化身思想の教えが根強く、偉人を神や神の化身として崇拜し、死者は仏として礼拝の対象としている。それは仏教の如来蔵思想・悉有仏性説、神道の万物に神が宿る汎神觀に由来する。

アヴァタラの思想とキリストの受肉思想とは異質である。聖書の啓示の神は万物の創造主で、父・子・聖靈の三つの位格を有する方、そのひとりの神が旧約の預言と予型の通りに処女降誕し、一度限りの死と復活を通して贖罪した点、また聖靈降臨によるならなければイエスを唯一の救い主、神の御子と信仰告白できず、多神教との大きな違いがこの点でも異なる。

サイババの著書『聖地』（サティア サイ オーガニゼーション ジャパン刊、一九九四年）には、サイババを神として崇める歌がある。「グルの御足を崇めましよう 英知の光に照らされて 尊きグル サイババ 尊きグル サイババ 大いなる神 大いなる神 サイババ 限りなき愛の 限りなき愛の サイババ 尊きたまえ 尊きたまえ 尊きたまえ サイババ』五二頁。

他に『サイババ イエスを語る』（同一九九四年）は、イエスも偶像神の化身の一人であるとし、インド的解釈原理で新約聖書のキリスト觀を説いた書。サイババは十番目の最後の化身者であると関係者は認め、彼を神と崇めている。

『チベットの死者の書』（ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九三年）一五八頁。

インド宗教や中国道教の死後觀には、死後どこに行き着くかが人間の呪文や善行によって異なる死後の賞罰應報審判思想（七七回忌）がある。それは人を恐怖に陥れる側面が強調されるだけで、救いとはならない。ここから罰当たり、呪われると言つ宗教的脅しが展開され、戒名の価値の決定や僧侶の優位性が説かれる。

キリストにある贖罪を得た者は、神の赦しと愛と命に生きられ裁きに会わない（ヨハネ五章）四節）。それゆえに、彼らのハルマゲドン終末審判への恐怖心も存在しない。むしろ終末審判を恐れる者や、教義・教祖・組織から来る呪術的影響に左右されて、「伝道しないと裁かれる」「……しない」と恐るしい」と恐怖心に駆られる原因は、マインド・コントロールされており、贖罪愛を受け入れない点にある。神は恐怖心を「えたり、呪う方ではなく、罪を取り除かれる恵み深い眞実な方」。

また聖書は多神教世界ではないゆえに七七回忌による死後の諸王偶像神による偽った審判思想の世界觀もない。

『多元社会の宗教集団』一一五頁によれば、米国の新宗教の大ざっぱなギャラップ調査として「六百万人がTMに、五百万人がヨガに、三百万人が神秘主義に、一百万人が東洋の宗教に関与している」と記す。

（9） キリスト教史 近・現代のキリスト教（W・ウォーカー著 ヨルダン社、一九八六年）一一八頁。

「フランチ・ダビディアン教団」の教祖デビッド・コレシュは幼少より、一八四四年一〇月の再臨説を説いたワイリアム・ミラー（一七八一

一八四九）の安息日再臨派教会に属していた。

「エホバの証人教団」は、教義の出発点を「地獄なし」から聖書研究を始めた。「人民寺院」のジム・ジョーンズは元テイサイブル教会の牧師で、聖書を閃きで読んで聴衆に語ることから、聴衆の理解はジェット・コードスターに乗っているかのようだ」と言う。彼は一方では正義感が強く、差別のない社会主義社会の理想を掲げ、南米北部のガイアナにコートビア建設のため集団移住。他方、セックスの虜にもなる程、人一倍欲望の持ち主として振舞う。その理由として「自分こそ神の化身・現人神だから」と正当化する。彼は薬漬けになり欲望の神を演じていった。

オウム真理教の麻原は、阿含宗の指導者の桐山靖雄の影響を受けて超能力や人格転換の教えを展開したように、過去の宗教遍歴や犯罪歴も大きく左右している。

『宗教辞典』（小口健一、堀一郎監修、東京大学出版会、一九七三年）によれば、「呪術（magic）とは、何らかの目的のために、超自然的存在（神 精霊その他）あるいは呪力の助けを借りて、種々の現象をおこさせようとする行為およびそれに関連する信仰の体系を意味する」とあり、雨乞いや病氣治療祈禱や惡魔祓い等の行為がある。これらは社会に善的影響をもたらすということ以上に、呪術師が場合によつては「神のような人間」として人間が崇められる行為であつて、眞の神と救いから遠ざける現象と言える。聖書では異教の業として禁じている（申命記一八章九節）二節）。

呪術が宗教と異なる一面は、宗教は神仏への信仰の人格的関係性を伴うのに対し、呪術は機械的手段で超常現象を起す結果、人を神と崇め、惑

わし偽る傾向が強い。

平岡正幸講演集『カルトにある家庭の崩壊と青年の意識』一九九七年。

『日本書紀（下）』（講談社学術文庫、講談社、一九八八年）一五一頁。

『空海僧都伝』弘法大師空海全集、第八卷九頁、筑摩書房、一九八五年。

出口王仁三郎著『道の光』天声社、一九九一年。

『新宗教』教団・人物事典（弘文堂、一九九六年）八八頁、五一〇頁。

秋元波留夫著『異常と正常』（東京大学出版会、一九六六年）三七頁。

小田晋著『人はなぜ、幻覚するのか？』（はまの出版、一九九六年）一四五頁。

（18）（17）（16）（15）（14）（13）（12）（11）

麻原彰晃著『キリスト宣言』（オウム出版、一九九一年）一頁。

彼はヨハネの默示録は重要な書とするが、パウロ書はパウロが異教徒からの改宗者である理由から無価値と発言し、異端者マルキオンと共に通すると同時に、仏典に基づく混合した私的解釈を行つ。彼が最初に読んだ聖書は默示録であった。

（19）『超能力秘密の開発法』（麻原彰晃著、株式会社オウム、一九九一年）六七頁に麻原彰晃自身が性格について語る。「このヨーロッパが必要だったのは、傲慢になりやすい人間だったからである。よくよく自分の性格を分析すると、自分が正しいという思い込みがあつて、他人の心の動きを当然のことのように無視してしまつことがあつた」と。

（20）（19）（18）（17）（16）（15）（14）（13）（12）（11）（10）（9）（8）（7）（6）（5）（4）（3）（2）（1）

（21）（20）（19）（18）（17）（16）（15）（14）（13）（12）（11）（10）（9）（8）（7）（6）（5）（4）（3）（2）（1）

（22）（21）（20）（19）（18）（17）（16）（15）（14）（13）（12）（11）（10）（9）（8）（7）（6）（5）（4）（3）（2）（1）

（23）（22）（21）（20）（19）（18）（17）（16）（15）（14）（13）（12）（11）（10）（9）（8）（7）（6）（5）（4）（3）（2）（1）

（24）（23）（22）（21）（20）（19）（18）（17）（16）（15）（14）（13）（12）（11）（10）（9）（8）（7）（6）（5）（4）（3）（2）（1）

（25）（24）（23）（22）（21）（20）（19）（18）（17）（16）（15）（14）（13）（12）（11）（10）（9）（8）（7）（6）（5）（4）（3）（2）（1）

（26）（25）（24）（23）（22）（21）（20）（19）（18）（17）（16）（15）（14）（13）（12）（11）（10）（9）（8）（7）（6）（5）（4）（3）（2）（1）

（27）（26）（25）（24）（23）（22）（21）（20）（19）（18）（17）（16）（15）（14）（13）（12）（11）（10）（9）（8）（7）（6）（5）（4）（3）（2）（1）

これが修行をつづけて来た者の最後の言葉であつた。」

特にカルト宗教の人心を煽るものに「亡國思想」がある。『立正安國論』（『日蓮』日本の名著八、中央公論社、一九八二年）には仏教經典からの災難警告が引用される。『薬師經』は七難、「大集經」は三難、「金光明經」には十三種の災いが警告としてあり、法華經信仰への重大性を説く。このように、今まででは国が滅びると言つ亡國思想が日蓮著『立正安國論』で警戒したことから日蓮の系統には亡國思想が強い。『日蓮大聖人に歸依しなければ日本は必ず亡る』（富士大石寺顕正会会長浅井昭衛著、顕正新聞社、一九九七年）。『日出づる國、災い近し』（麻原彰晃著、オウム一九九五年）は終末思想を強調して人心を惑わし、恐怖心を起させて信徒を獲得する態度が伺える。これこそ危険な思想と言えよう。

『狂信』（フランチ・ダビティアン著、恒友出版、一九九五年）一三五頁で、テビット・コレシコは聖書講義で「ソロモンの歌を引用し、自分は一四〇人の妻を持つ資格をもつてられている」と言ひ。

ティム・レイターマン、ジョン・ジェー・コラス著『人民寺院』（ジャーブラン出版、一九九一年）二七九頁。

（26）『週刊文春』一九九七年五月一九日号、文芸春秋社

「事實を話すこと」で、辛くともそれと向き合つて、裁判に対し真摯に臨んでいくつもりですし、たとえ私の裁判の対象でないとしても、オウム真理教が起こした事件について考え方抜いていくつもりです」と最後の意見陳述を述べた。

（27）ウイリアム・ウッド著『エホバの証人 マインズ・コントロールの実態』（三一書房、一九九三年）一一一頁以降、『マインズ・コントロールから脱出』（パスカル・ズイヴィ著、恒友出版、一九九五年）一五〇頁以降、『統一協会からの救出』三五頁以降。

参考文献

- 『日本宗教事典』弘文堂、一九八五年
- 『新宗教事典』弘文堂、一九九〇年
- 『歴史公論』日本的新興宗教』雄山閣、一九七九年
- 『カルト』マーガレット・シンガー著、飛鳥新社、一九九五年
- 『カルトの構図』フーゴー・シュタム著、青土社、一九九六年
- 『多元社会の宗教集團』アメリカの宗教・第一巻、井門富士夫編、大明堂、一九九一年

- 『現代宗教の反近代性 カルトと原理主義』阿部美哉著、玉川大学出版部、一九九六年
- 『神々の時代を問つ』財団法人キリスト教視聴覚センター、一九九四年
- 『狂信「ブランチ・ダビデイアン」の悲劇』ティム・マディガン著 德間書店、一九九三年
- 『人民寺院』ティム・レイターマン、ジョン・ジェー・フース著 ジャブラン出版、一九九一年
- 『インドの神と人』ルードルフ・オットー著 人文書院、一九八八年
- 『マインド・コントロールの恐怖』スティーヴン・ハッサン著 恒友出版、一九九三年
- 『マインド・コントロールからの脱出』バスカル・ズィヴィ著 恒友出版、一九九五年
- 『マインドコントロールからの解放』オウム真理教信徒救済ネットワーク編著、三一書房、一九九五年
- 『人はなぜ「幻覚するのか?』小田晋著 はまの出版、一九九六年
- 『キリスト宣言』麻原彰晃著 株式会社オウム、一九九二年、他多数
- 『統一協会からの救出』田口民也著 いのちのことば社、一九九二年
- 『サイバーベイエスを語る』サティアサイバ述、サティア サイ オーガニゼーション ジャパン、一九九四年
- 『聖地へ』サティア サイ オーガニゼーション ジャパン編、サティア サイ オーガニゼーション ジャパン、一九九四年
- 『チベットの死者の書』ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九三年
- 『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫、岩波書店、一九九二年
- 『比較宗教学(異端・諸宗教)』川口一彦著、東海聖書神学塾授業用教本、一九九五年